

図書日和

2016年10月号

鹿児島中央高等学校図書館

平成28年10月25日発行

先生・お薦めの一冊

『点と線』 松本 清張 著 (新潮社 他)

地歴公民科 福元利之先生

『点と線』は、松本清張(1909~1992)初の長編推理小説。雑誌『旅』に1957年2月号から1958年1月号まで連載されたもので、今から60年前に書かれた作品である。しかし、今なお推理小説としての本質は色あせず、2007年にはビートたけし主演でドラマ化されたほどである。タイトルの『点と線』は、推理した一つ一つの事柄(点)が最終的に一つの真相としてつながっていく(線)ことを示したものである。

内容を少し紹介しよう。ある男女の心中事件に疑念を抱いたベテラン刑事が、事件の裏の真相を探るため、一人、捜査を続ける。一方、情死した男は、××省の汚職事件の関係者であったため、この事件を追っていた別の刑事と協力し、一人の人物を容疑者として追及しようとした。だが、この人物には、時間という完璧なアリバイがあった。二人の刑事は、交通機関(列車や航空機)を駆使して巧みに完成されたアリバイを看破し、真相に迫ろうとする……。

松本清張の著作に触れたのは、高校3年の時であった。当時仲の良かった友人が、彼のファンであり、本を貸してくれたことがきっかけだった。余談だが、この友人は、他にもいろいろな本を貸してくれ、私の人格形成と成績下降に大きな影響を及ぼした(?)人物であった(こういう人はむしろ「悪友」と呼ぶのが相応しいかもしれない)。

さて、清張は、推理小説だけでなく邪馬台国の位置に関する歴史的考察など幅広いジャンルに多くの作品を残した博識かつ知的探究心の強い作家であったが、氏の文才が遺憾なく発揮されたのは、やはり社会派推理小説の分野であったと私には思われる。確かに、彼の作品を読むと、時代の古さなどは感じさせるが(『点と線』では新幹線も開通していない)、今なお多くの読者を獲得し、ドラマ化されることが多いのは、推理小説としての本質が色あせず、普遍的な輝きを放っているからに他ならない。登場人物それぞれが抱える裏(闇)の事情と犯罪に至った経緯、そしてそれを解明しようとする主人公の苦悩、また、当時の社会状況や社会問題なども勘案した物語のプロットの完成度。その魅力は、一度本を開くと、勉強など忘れて一冊読破するまで眠ることができないものであった。おかげで、何度悲惨な目にあったことか、今となっては良き思い出である。しかも、彼の小説には妙に難解な単語を用いられることが多く(例:「蠱惑的 コウネ」「鞆海 トカイ」など)、電子辞書のない時代、国語辞典片手に読むことも……。清張は他にも『ゼロの焦点』『砂の器』など名作を数多く残した。一度手に取って読み始めてみてはいかがだろう。刑事や推理小説が好きな輩なら、次第に読みふける自分自身に気づくであろう。

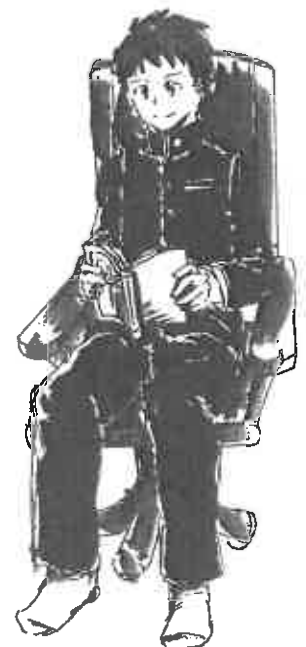
一生の読書は二十歳までの読書量で決まると聞く。勉強や部活で忙しい高校時代だが、「十代の感性」で読書できるのは今だけである。ぜひ、息抜きにでも本を読んでほしい。ところで、私にとっての清張は「息抜き」だったのだろうか……自問することは、愚問かもしれない。

読書週間が始まりますよ!

2016年読書週間標語 「いざ、読書。」

期間 10月27日(木)~11月9日(水)

行楽の秋、スポーツの秋、食欲の秋……そして模試の秋。何かと忙しい季節ではありますが、時間を見つけて読書を楽しんでみてはいかがでしょうか。2年生の皆さんには、10月に読破した本の冊数調査の協力をお願いしています。ぜひ、意識して読書をしてくださいm(_ _)m



9月の貸出冊数 209冊

学年 組	1年								2年								3年							
	1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	4	5	6	7	8	1	2	3	4	5	6	7	8
貸出数	2	6	7	8	20	2	6	6	0	12	0	4	6	29	16	9	1	0	16	10	15	6	11	17
合計	57冊								76冊								76冊							

9月は読書を楽しむ時間もないほど、慌ただしく過ぎていきました。意識して読書をしなければ、読書をする時間を作ることは難しいかもしれません。月に一冊でも本を読むように意識してみませんか。

秋の本棚

* 『となりのイスラム』内藤正典 著 (ミシマ社)

近い将来、三人に一人がイスラム教徒になるといわれています。あなたはイスラム教を正しく理解していますか？

* 『エミリの小さな包丁』森沢明夫 著 (角川書店)

毎日をきちんと生きることは、人世を大切に歩むことです。人間の限りない温かさと、心の再生を描きたい癒やしの小説。

* 『みかづき』森絵都 著 (集英社)

昭和～平成の塾業界を舞台に、三世代にわたって奮闘を続ける家族の感動巨編。森絵都の久しぶりの長編小説です。

* 『明るい夜に出かけて』佐藤多佳子 著 (新潮社)

コンビニのバイト、ラジオのリスナー・・・夜の中で出会い、知らない人たちがどこかで共有する思いがある。孤独な心を、ラジオやコンビニで埋めていく・・・現代の鏡のような小説です。

* 『何様』朝井リョウ 著 (新潮社)

直木賞受賞作品『何者』のアナザストーリー。ぜひ、両方ともお読みください！



シリーズ・明治維新150年企画

ご近所出身の偉人たち

明治維新150年(2018年)事業の準備がいろいろな行政機関で始まりました。私たちの学ぶ加治屋町は、まさに明治維新の立役者を輩出した地でもあります。昨年、本校52期生日本史選択者が作成した『加治屋町の偉人たち』という冊子を参考に、図書日和のシリーズとして明治維新の立役者を紹介していきます。

第1回は本校化学実験室で産声をあげた「東郷平八郎(1847～1934)」です。当時の薩摩には、地域の年長者が年少の子どもたちに学問や武道などの手ほどきをする「郷中教育」というものがありました。東郷も6歳から、西郷隆盛の弟・吉次郎から四書五経の素読と習字の手ほどきを受けました。「寡黙な提督」と呼ばれた東郷は、このころから勇敢で潔く、弱い者を憐れみ、爽やかな心を持ち、議を言うな！という薩摩の教えをしっかりと身につけていったのでしょう。日清・日露戦争の勝利に貢献した東郷。特に日露戦争で無敵艦隊と呼ばれていたロシアのバルチック艦隊を撃破し、一躍世界にその名を知らしめました。そして、海軍大将・東郷は「東洋のネルソン」と称されたのでした。

参考文献：『加治屋町の偉人たち』鹿児島中央高等学校52期日本史選択者 編
『東郷平八郎のすべて』新人物往来社 編 (新人物往来社)

編集後

涼しくなってきました。読書の秋の到来です。今年の読書週間の標語は「いざ、読書。」です。心地よい季節に読書を楽しみましょう。部活動生にとっては新人戦などで忙しい時期ではありますが、時間を見つけて、読書を楽しんでください。高校時代の読書体験を書いてくださった福元先生、本当にありがとうございます。寸暇を惜しんで読んだ本は、いつか知恵や力に変わっていくことでしょう。ぜひ、秋の夜長に読書をお楽しみください。

